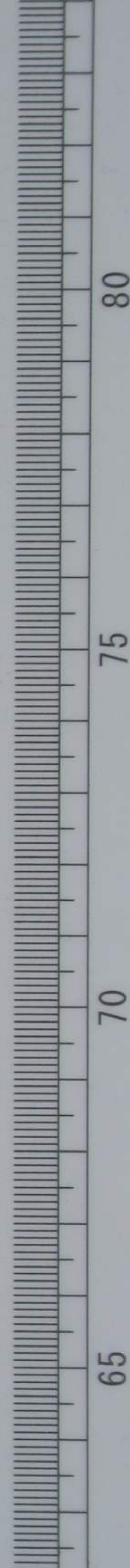
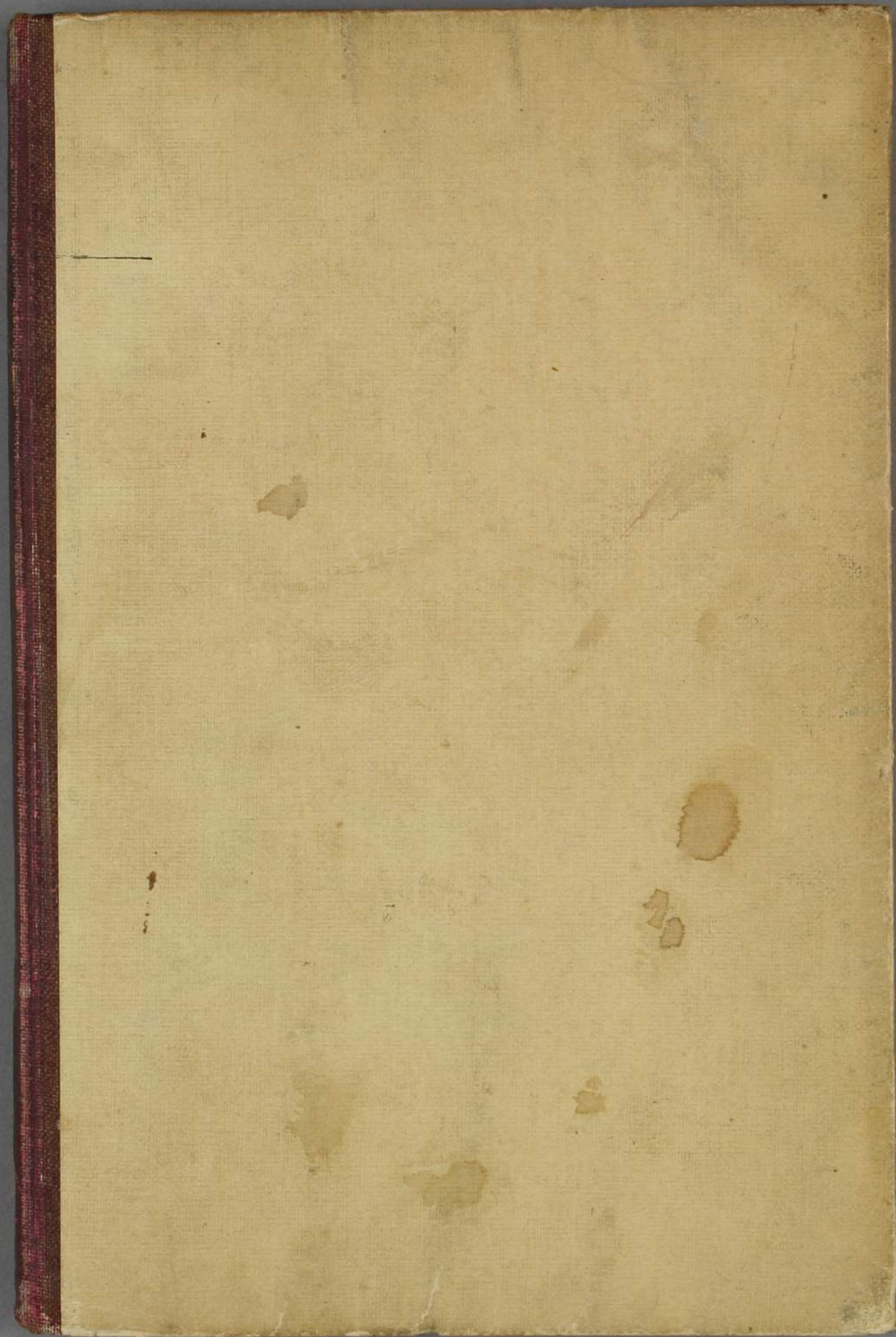


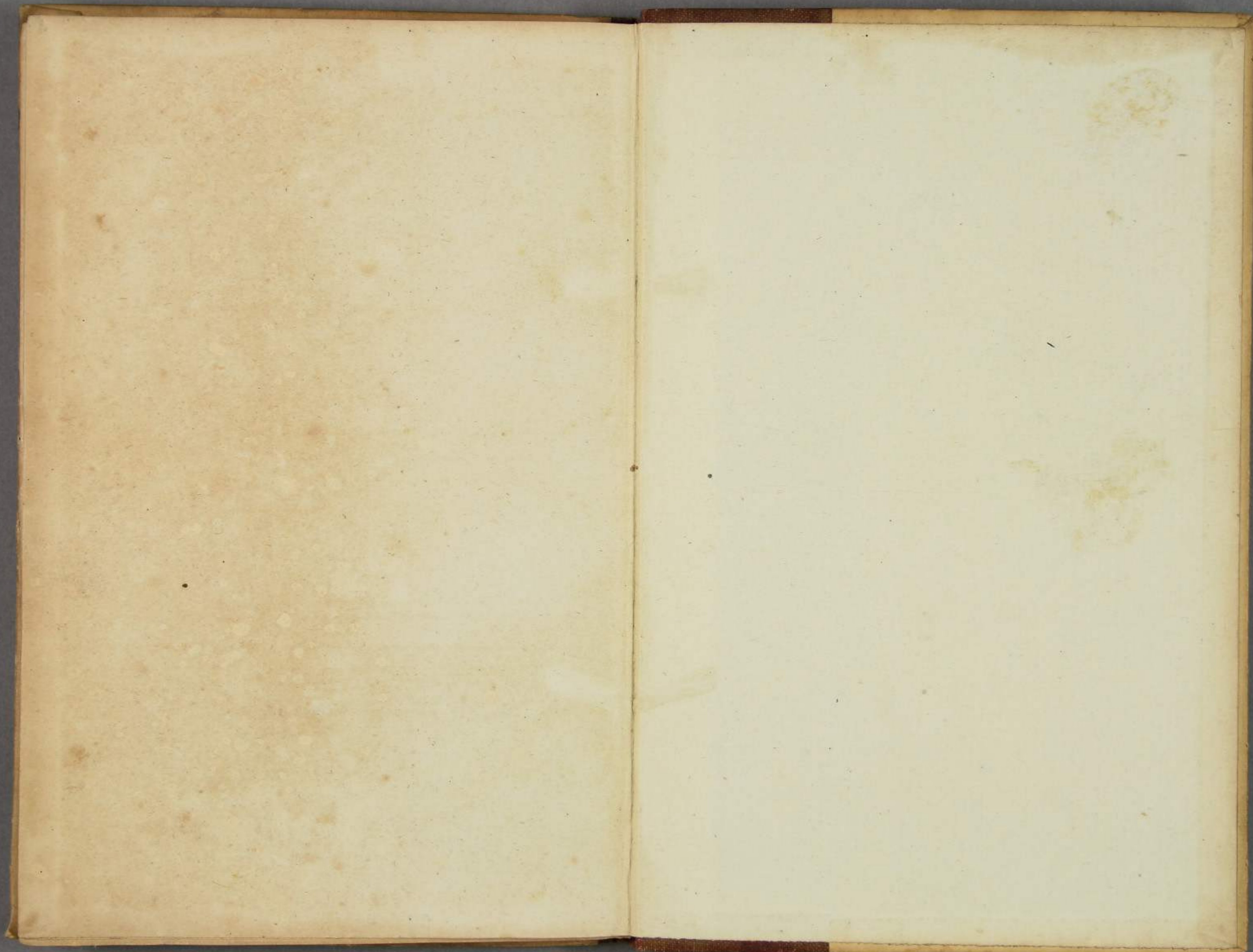
凝視

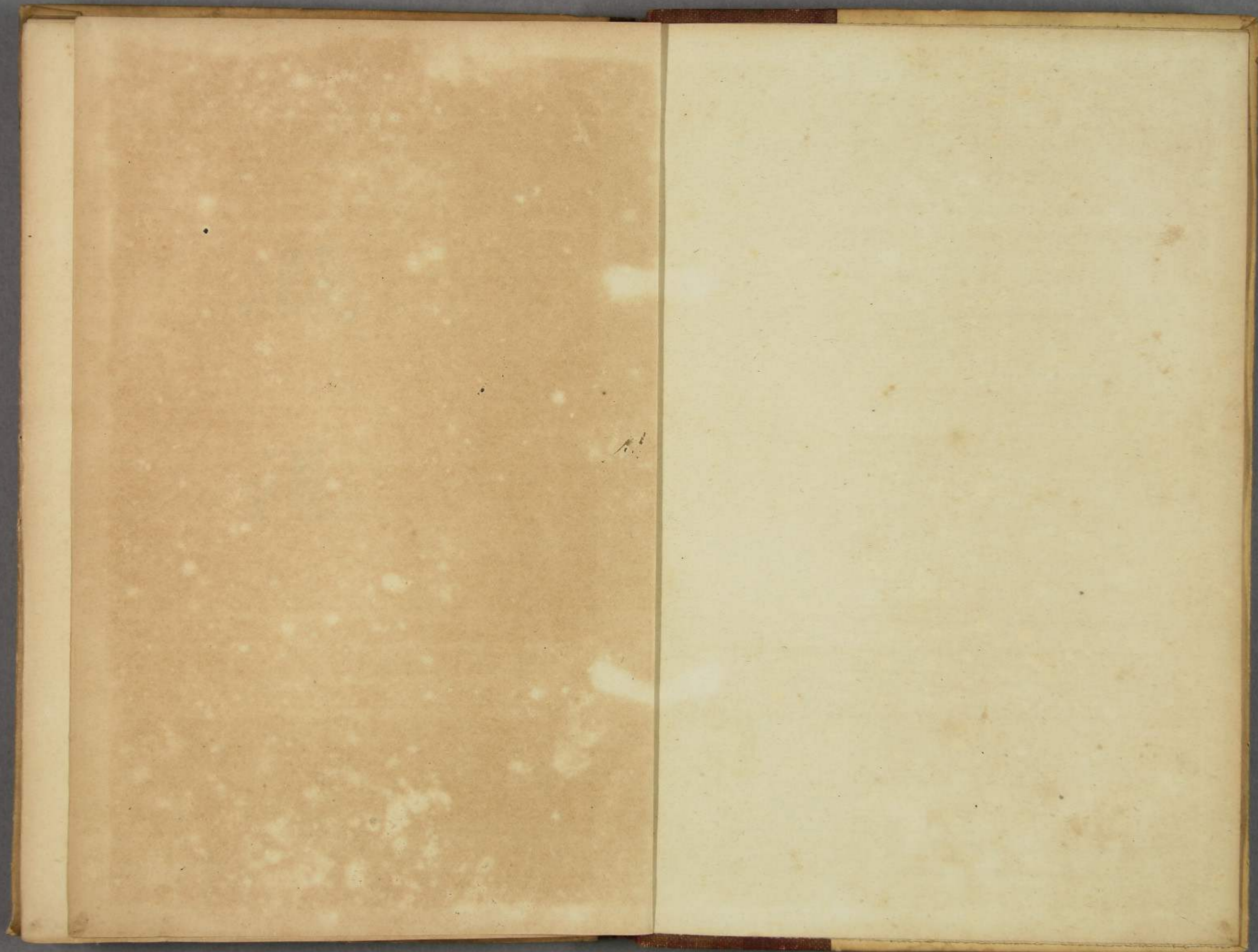


擬
祀

本野盈太郎







凝

視



六

九

この書は私と婚姻の式をあけてから十一年の間、相住んだ人がついに永眠したのに對して、私の心に起つて來る言葉を書きつけたものであります。

私がこの詩を新しく書いたのは、自分の情緒、感傷を人に強ふる爲めではなく、私の生活と相對して、最も親しく相闘つた親しい友人が死に墮ちて行つたについて、私の心に生れて來る感銘を言葉にせずには居られなかつたから、言葉にしたのです。私は自分が藝術に身を委ねて居る

一人として、自分の生活の中から生れるものを、信じて公にする心で、この詩集をも公刊のものとするのです。ただ私の心を激しく撃つたこの私事の爲めに、自分の激動を人に強いる事は、私の恥づる處で、私はその境には踏み入つて行かぬ心に思つて居ります。

私はこの人に向つて、生前には最もあらはな戦ひを挑み、互に相苦惱した生活を續けて居りました。それに依つて私達は次第に深く相欺かない心になつて居りました。この人は私のこれまで知つて居る女性の中で私の最も信頼して居た一人でありました。この信頼と、争闘とは、私達の友情であり、また愛でありました。

この人の死後に於ては、この人は全く私に浸透し、新しく私の内に生

きよらうとして居ります。

私は、私のこの集の言葉に心をひそめて下さる人に對して、これだけを書き添えます。

一九一五年六月

水野 盈 太郎

一九一五年

六月—七月

われ、今御身にも言はん。

この心にまつはれるものすべてを振ひすて
ただひたすらに御身を凝視して

わが心をば言葉とせん。

御身は今もなほわが身に親しく生き

わがまのあたりに明かに立ち。

正しき形していませり。

わがもの言はんとする人よ。

われにまたもの言はんとする人よ。

御身を信ずるこの心の勇ましさをよ。

わが言葉生き、感じて踊り傳り行く

この愛をなみすものありや。

われ今、御身にも言はんとする。

御身の痛みは遂に終つた。
肉体の感覚が死んで行くんだ。

嵐が俄かに襲ひがかつたのだ。
恐しい苦しみと痛みとが御身の全身に爪を

立てた。
御身のからだに全力をあけてそれに抵抗し

た。
だが悪いことをして居た……私達はかう
いふ不意の暴逆に對して
もつこ抵抗する力を貯へて置くべきであつ

た。
御身の力が遂に盡きてしまつた。
ああ壯烈な苦闘であつた。
それを私は恐れて慄えながら見て居た。

だがこれがすべての終りである。何人が言ひ得る。

私はその時に呼吸を止めたからだが、

永久に口を噤んで血の熱が冷えて行きなが

ら言つた言葉をよく知つて居る。

この親みつくしたからだ

今、荒れ狂つて居た痛みを征服し盡されて

しまつて

疲れはてた不感の中に沈み入つて行きなが

ら

静かにものを言ひつづけて居る。

『これで私の肉体の現世が終つたのですか。

あのやうに苦しく、暗く、はかなかつた

だが無限に進むべき道の重荷を背負つて居

た

まだその眞實にまことに踏み入つて居るこ

も思へなかつた。

私の肉体の現世は終つたのですか。

私の寂しさに堪へられなかつた失望は何處

に行きましたか？

私の愛は何處に行きましたか？

私が黙つて我慢をしつくして努力した「よき生活」は何處に行きましたか？

私の懷疑と嫉妬は何處に行きましたか？」

その跡で「あゝ」と心底から空漠と孤寂とに向つて御身は泣いて居た。

私はそれに向つて沈黙して敬虔な同情に沈み入る。

『私にも解らない。』

『それでは、もうあなたも子供達とも離れるのですか。』

『今あなたは初めて自分を包むものがない』

孤獨にはいるのだ。』

愛はこの中から眞の力を涌かすのだ。

御身の明かに現世に通じる言葉は今すぐ絶えるだらう。

しかしこの時に御身の魂は新しく知らぬ世界の中に目を覺し始めるのだ。

今、私の目にはただ底のない闇が見え

冷い寂寞が親しくからだに感じられる。

御身より後に歩むものはまだ明かに知り得ない世界だ。

御身は今それに引き入れられて行きながら
躊躇して居る。

しかし私は刻々に御身がその闇の方へ向ひ
ここにある肉体を捨てて行くのを見た。

この再び破れない御身の沈黙は
この時御身のからだを圍んで立つて居る人
々に

静かに反抗を許さない力となつて御身の言
はんとする言葉を響かせた。

生きてここに立つて居る人々は御身の力を

感じて

その身の持つ眞實が明かに曝されて行く。

まだ挽歌と葬りの言葉とがかからない御身
の前に

極めて嚴肅な箴黙がうなだれて居る。

御身は今すべてのものを離れて

御身の孤獨の中に自ら足を踏み入れて行く。

その三十年の住家は捨てられたのだ。

六月二十五日、二十七日夜

病院の應接室の椅子は倦怠した白い色をして居る。

私はこの亡骸を送り出し、それに向つて敬禮した後、この室に一人はいつて来た。

朝の日の光は鮮かに勇ましく室の外で踊つ

私は椅子に腰をおろしたが

この時心に強い反感が起つた。

この十四年の間、私はこれ程人のなすまゝになつて行く御身を見た事がない。

そのすぐれて發育した御身のからだは私の

永い間の誇りであつた。

御身はすぐ前の時まで私と並んでその足で歩いて居た。

今御身はその臉をさちたまま首を動すこと

もなし得ないで

狭い担架の上に横に置かれ、知らない男達に荷はれて行つた。

私はその亡骸に向つて敬禮した。

私は目が見た現象に欺かれたのだ。

この偽に反抗する事が出来なかつたのだ。

これが終りと思ひ

これが否む可からざる死だと思つた。

そしてこの白い室にはいつて來た。

だがすべてが欺瞞だつた。

私は昂奮して、しかも倦怠を感じて居る。

この數時間の中に疾走してすぎた現象のめ

まぐらしさに欺かれてしまつた。

だがそれらの事はすべて今は私の心に倦怠

を感じさせるにすぎない。

御身は何故起つて歩まない。

御身は明かに死の事實を否定して居るでは

ないか。

私のすぐ傍に立つて居るではないか。

そして靜かに私を見衛つて居るではないか。

六月二十七日夜

目を覺ませ。

その冷却の中より躍り出でよ。

御身を閉鎖せる肉体はすでに地に腐りゆく

ものなり。

今石のごまく横たはり

多くの人に圍繞せられて

御身は耻しきにも面をかくすあたはず。

御身は尚ほ疲れはてて懶惰なる休みを願ふ

か。

躍りいでよ。

軽やかに林を走る兎のごまく

その重きものより逃れよ。

自ら火を吐きて哀へたる身を焼き

新に蘇る孔雀のごまく

その重く冷えたる肉体の中より躍りいでよ。

久しく御身を悩したるさまさまの病は
今その肉体の死も減び行きたり。

御身はかの處女なりし日に

その全身がゴムのごとき強き弾力を帯びて

鋭く、勇しく、軽かりし

かの時に歸れ。

壁をあけて林の道を走りゆけ。

ここに柩の中に横たはれる肉体の冷さよ。

この死の寂寞よ。

人を欺くなかれ。

欺きて悲しく暗きもののみを見するなかれ。

わが愛着は長き時の記憶もこもに

この肉体にまつはりて漂へども

ここに目を閉ぢたる人は

かへつて白日の光の下を飛ばんこ願へるに

あらずや。

日は空も地もに充ち

喜ばしく若やかなる銀の光に湧き立ちてあ

り。

御身が餓ゆる心にて愛せし林の木は

あざやかなる緑の泉を涌かしむ。
御身は飛ばんここを願へり。
目覚めよ。
この冷き肉体の中より躍りいでよ。

六月二十八日夜

5

痛みは終れり。
異常なる冷き眠りに横たはる
この人よ。
何故に常のままなる形をなして
われを欺かんとする。

無極なるもの
微かに光を吐きてわが目に見ゆ。
今ここにある肉、体は
御身がのがれ去りたる空しき跡なり。
わが心この形にまごはさる。
されど冷く靜かなるは空しければなり。
この亡骸の傍に立ちて
われ御身の歩み去れる跡を見
われど御身との隔れる遠さを感じず。
悲しみはここより湧き。
はてしなき追懐は

この寂しさの中に群り起る。
われその群り起る心の
新にあざやかなるがために騒ぎ立ち
目が見る冷ささ、この遠き隔りこのために
涙をながす。
わが心は昏倒す。
さなり目は水を流せり。
しかれどもわが心なほ御身を求む。
求めてこの身に群り騒ぐものを破り
わが足の下に踏み
御身を親しく抱かんす。

われを欺くものを滅し

この目にて正しく御身を見んことを望む。

わが心内に戦ひ

自ら憎む。

憎むべきはこの悲しみてながす涙なり。

何故に御身はかくわれを遠ざかり行くぞ。

「神が秘めたまふ境」をわれは信ぜず。

わが心これを求めて猛り怒る。

六月二十九日夜

わが心に御身は光る。

永き日の過去は胸に迫つて浮び來り

御身の全身は息つまるばかりに我を抱く。

わが生きたる肉は憤激し

ものに襲はれたるごまく目を見開く。

この過去はみな吾こ御身こが歩みたる跡なり。

吾等の相容れざる肉こ肉こは
終りなき戦ひの前に相向ひて立ちたり。

燃ゆる憎悪は

さらに偽りなき愛を求むるが故に

心をくつがへして怒り

はけしき失望こ寂寞こは

この空隙に忍び入りて

吾等の心は眠るここあたはざりき。

ああ休みを知らざる心なりしよ。

疲れすして歩みたる人よ。

さらに今われに迫つてわが心にも
の言はん
こす。

はてしなき「時」

わが前に見え。

無窮なる曠冥の寂しさ

わが心を浸す。

われは言葉なくこの曠冥の中
に立ち
ただ親しく御身を感じず。

されば生きよ。
永遠なるものとなりて生きよ。
今わが頼に感ずる暖き人よ。

七月一日夜

7

私の家の一室に置かれてあつた御身の亡骸
は
すべて煩しく心を悩すものをふりすてて
ただ一つ御身が常に求め祈つた心に歸つて
居た。

冷い石ミなつた肉体も
亂多な紛雜を収めつくして
永遠にその目を閉ぢて居た。
御身ははじめに御身に歸り
却つて私に迫つて來る。

今夏の夕の町を私は歩いて居る。
空の雲にも街樹の葉の茂みにも
美しく汗ばんだ湯上りの人の肌にも
俄かに暑い夢を見せる町のあかりにも
賑かな夢魔を含んだ饒舌が涌き返つて人に

競ひかかつて來る。
私はその快さに感じ
それに誘はれて歩いて居る。
私の身には何のくるしい重さもなく
強いて御身を亡くした悲しみも作らず
爽かな心で歩いて居る。

この時に卒然として私は嘗て知らないにが
さを感じた。
それは御身を亡くした悲しみでもなく
魂を脅す孤寂の淋しさでもない

言ひがたい心のがさだ。

今見たこの夢魔の錯覺が

私の心を浮かせて笑はせた醜さだ。

入るべからざる境に踏み入つて驚く羞耻の

情だ。

まだ人の平常の静けさに歸つて居ない私が

町の群集の軽い喜びを感じて居る。

これは遊蕩兒のする醜い喜劇と同じだ。

私は心のがさに足を引き返した。

私はふり返つて御身を見たのだ。

御身はやはり私にちつと寄りかかつて居る。

笑ひもせず泣きもしない。

眠つて居るやうに静かだ。

私の心をさがめるものがない。

私の孤獨を誰れさしつけよう。

天からまつすくな雨が降れ

七月一日夜

祈る言葉を知らざれば
われは祈らざるなり。

魂の安さは人に托すべきものにあらず。
たきものの烟にむせかへることも

亡せ行きたる人は幸にあらず。
聲を合せて叫び、そりたつることも
その生命が背負ひたる泥を黄金とするあた
はじ。

誰か空なる同感さ
嵐に驚きたる感激さに迷はんや。
われはただこしへに御身を見る。
相並びて行くべき道を歩むべきのみ。
御身はさらに明かに生きよ。
御身が負へるものを

何人も代る能はざるなり。

祈る言葉を知らざれば

われは祈らざるなり。

七月一日夜

静かな黎明が来た。

空が動かない銀灰色をして居る。

目を覺したばかりの雀の聲が濕つて居る。

こまかい昔のしなない雨が降つて居る。

この目が見る広い空は

曠漠として動かない烟の壁を作り
その烟の中に恐しい生きた力が蟠つて居る。

私の過去が壁畫のやうにその空に見える。
過去は深く刻まれたままで永久に動かない。
その動かない中から一度生きて居たもの

力が再び新しく湧き上り

親しく現在のこの身に迫つて来る。

時はこの瞬間も同じ力で移つて行き

新しく消すべからざるものを刻む。

私のこの頭で考へたこと

この手でしたこと

この肉体がたべたこと

すべて偶然に起つたこと思はれたものに

避くべからざる胚胎の目が光つて居た。

在つた事實の權威は絶対だ。

私はこの事實の前に

罪を犯した蕩兒のやうにからだをすくめ

又は殉教者の歡喜に昂然となり

後悔に身を慄はし

愛の激動で全身をしほり上げられる。

懺悔と賞嘆とに心が騒ぎ立ち

身の中から湧き上る楽音に包まれて昂奮する。

初めて私が御身を見た日

互に眠つて居た本能が感じて撰び合つた日
御身の稚い愛が目覺めた日

それは危い夢を見たのであり

また全身の力を盡した激動であつた。

私の全身が目覺める始めであり

御身の全身が光る始めであつた。

後のあらゆることはこの時に生れた。

この時に私達は二人の生の創世の第一歩に
立つた。

この時は、この時の中に含まれて居る恐し
い力を知らず

夢に包まれて居ながら心が燃え立つた。

永い道の第一歩は

美しい臙けな想像さ

微腫を帯びた感情の快さで始まつた。

この時に私達は若さが輝き

昏盲な本能が美しく光つた。

私の生の慾望はこの喜びの中に包まれて沸騰し

御身は永遠の姿をその一點に籠めつくした
と信じた。

私達は悲しみと、疑ひと、失望とを冷笑し
た。

この無謀なる冒険を

今私は明かに見る。

私の生の慾望が真に目覺めて

貪婪に充ち

夢を喰ひつくした今の時に

この初めの日の涌き立つた心を見て
自分と御身と相對した生活の爲めに感激し
深く思ひ沈む。

御身が失望にせめられ

御身の目が常に欺かれた夢の爲めに怒りを

含み

私の貪婪を憎んだ日に

私はみづからの魂の孤寂に慄えて居た。

私達の血を流す争鬭は私を鞭つた。

私は自分の足を踏みしめて歩いた。

自分のつまづいた悲しみを御身に分たなかつた。

ああ二人が流した血はまだ足の下にある。

御身も今これを見つめ

私もそれを見る。

そして私はこの血の中に目を開けて居る愛を感じる。

長いながい日がすぎて行つた。

私は御身の感情を反逆の毒をもつて冷笑した。

私は掴まうとするものにばかり心を鋭くした。

私の身は傷み泥こでまみれて居る。

それすら私はみづからを養ふものとした。

この飢餓ははてしもなくつづく

私の身の暗さがはてしもなくつづく

その中に御身のその肉体は死んだのだ。

私は今御身の前になほ自分を持つ。

私のこの心の陰に傷ついて居た人は

私の全部をうなづかずして死んだ。

うなづかうに願ひながら憎みを感じて居た。
私はただ善美の世界を抱く爲めに飢ゑて居
た。

ただこれだけを恃む心の前に
にがい水を飲んだ御身は
その最後の一點を知り得ずして生と死との
境を越してしまつた。

私はこの御身を見つめて居る。

御身は振り返つて私を見て居る。

この時に私の心に群り起るものは
みづから我に負つた罪の痛さである。

この肉体の貧しさの悲しみである。

私は自分のからだをここにさらして見せる。

私の全部はここにある。

この幻さなつて見える過去の前に

今のこの身を裸体にする。

私は空に何も恃まない。

かつて歩みすぎて來たものはすべてこの肉

体の中にある。

御身の流した涙もここにある。

私の貪婪も、爲我の心も

私を溺らせる愛も

みづから耻づる愚さも
すべてこのうちにある。

御身よ

私の裸体を見られよ。

これより外に何物があらう。

かくすべき何物があらう。

七月七日夜

闇は静かに重くなりたり。

地はその底に深く沈み入り

その上を雨降りそそぎ

こまかなる水粒厚く包みたり。

われは目さめて

わが心に映れる幻を見る。
われを見まもりて離れざる
御身の腫を見る。
涙おのづから心に漲り來りて
全身に惡熱起る。
ものを完くする能はざる
人間の寂しさ切に胸に迫りて
止めがたき悔恨となり
わが心を流れ出す。
愚かなる心が安じたる因果は
われを自ら憎ましむ。

すべてのものわれに向ひて
わが貧しき智恵を笑ふ。
わが瘦せたる姿は
日の光の中に焼けて
焦けほそりゆく。
御身の腫もまたわれを凝視して
笑ひ出でんす。
この恐れと寂しさこに迫られて
われは逃るる處なし。
涙は一度漲れども
おのづから乾きはて

こゝに残るものは
目を開きたるわが肉体なり。
血はしづまりはてて冷えんこす。
多くの目われを見つめ
わが貧しき智恵を笑へり。
御身もまた笑はんこす。
われは疲れたる目を閉ぢ
病める獸のごこく自ら憎み悲しむ。
誰かわが爲めに祈る言葉を知らんや。

七月七日夜

静かなる黄昏は來りぬ。
雨雲は遠く流れ去りて
豊かなる碧き光
わが頭の上にあり。
柔く水を含みたる空より

ゆるく慄ゆる光、漂ひ來る。
寂しさは水のごく心を浸して襲ひかかる。
わが魔睡にかかれる心は
すべてを忘れて一つのものを見つむ。
わが胸より熱奪ひ去られゆき
力を失ひてただ一つのものを見つむるなり。
されどこの寂しさは
悲しき涙を流さしめず。
わが心を刺して
枝を切られたる木が溢れ出づるごごく
新しき芽をふかしめんこす。

わがうちに激し怒りたるもの消え去りて
靜かに涌き出づる水、生れ來る。
わがいのちは痛み
傷つきたれども
われはなほ獨りみづからを恃めり。
御身の隠れ去りたる悲しみを負ひたれども
われみづからの力は碎けざりき。
われはこの碧き光のもごにある
無数のいのちごごもに
今もなほここに立ちてあり。
この寂しさに包まれながら

みづからの中に芽ぐむ新しき力を抱く。

わが傍より隠れ去りたる人よ

われに迫り來れ。

限りなく現れ來る幻の中より

靜かに微笑せよ。

われごごもになほ遙かなる道を歩みゆかん

きて

微笑せよ。

七月七日夜

わが瞼の重さよ。

沈み入るごごき心の暗さよ。

目を開きたるままにて

空に形なきさまさまのものを見る。

われははやくも激動に疲れ

わが心に起りたるすべての事を
信するをいさひ、のがれんを願ふ。
日の光があざやかに見するものを
空なる幻さ感じ
ただひたすらに眠り入らんさす。

こは時が移り行く間に
ふさ起りたる夢なりや
わが肉体は生きたるままにて
息をこさめ
神に憑れたるもののごさく

すべて忘れて立つ。
われ、在れども呆けたり。
たださまさまの形なきものを身て
わが心の孤寂を感ず。

すべてのこと
すべて空しき値さなり
わが足を支ゆる土
俄かにその重さを失へり。
わが全身は啞のごさし。
ここに地に支ゆる力なへて

身はくづれ倒れんさす。
ただもの言は変して
身の内を冷き水ながら。

ただ一音の鈍き響
わが身の内を貫き

われははてしもなく沈み入らんさす。

ふと驚きて目を見開けば

白き日の光の中に

緑なる木々の葉の茂れるが映れさも

わが身は明かなる力を生むをいさひて

ふたたび瞼を閉ぢんさす。
ああ今、われを襲へるものは夢なりや。

七月八日

私の身のまはりには広い海となり
闇は極めて微かな青さに光つて居る。
寂しい水が浸々として胸をひたし
心はひそみ沈み入り
その青い奥をすかして見る。

からだは異様な冷さで慄え
口に濁つた液体をのむ。

しかも身を壓する力は
静かにして強く
私は従順にその力の方向に従つて行く。
私の感觸は刻々に
陰鬱になり
冷くなり
蒼白くなる。
そしてこの闇の中にただ浸り入る。

この闇が開く

私は心を誘ふ力の強さを俄に感じた。

闇が開く

闇の層が切り開かれる。

私はその中にはいつて行く。

私の心は感じる。

新しく確かに感じる。

この青い光で照されて私の中から

かつて知らなかつた感觸が生れ

私の目がこの闇の奥を見る。

私のからだが重くなつた。

死んだ人が私の中にしみ入つて来る。

そして私は『透明』を感じる。

私の目は今、死んだその人の居る境に觸れ

ようこする。

しかし力が弱い。

私の本能はその境を感じようこして居なが

ら

それを貫いてはいれない。

私の身はこの境の『透明』を感じながら濁

つて居る。

私は前の時よりもたしかに
この不可知の境に近づきながら
今、私に感じられる幽暗な青さが
明かな太陽の下の實在と等しく
私から隠れ去つた人のからだは
幻影でなく在ることを知りながら
私にはまだその『透明』を貰けない。
浸々こものをひたす水に
堤がまだ切れない。

ああ御身の乗り越えて去つた一線

一緒に嵐に揺られて行きながら
その人のいのちだけが
ふつつりこ切れた一瞬のあの時から
私のこのひそみ、しみ入る心
ああわが心よ、心よ。

七月八日

花がさいた。

私の臉のうちはつみ赤い花がさいた。

それは睡蓮だ。

空が碧い。

そのある日のひるの日の光が

私の目の中に今生き返つて居る。

その日に生きて居たものは

すべて土に食はれてしまつたが

私の臉の中にははつきり残つて居る。

恐しい迅速な變轉だ。

今はその肉体が

この眼前のものに向つて

太陽の光を、豊かな色彩を通はす力を失

つた

その人も

その日にはまだ處女だつた。
まだ孕まないからだは
血が美しく盲動して
その中に眠つて居る種子は
無限の不可思議に輝いて居た。

時は絶え間なくものを葬り
しかもいつも鋭く光つた頂點を見せて居る。
今この頭の上にある碧い空は
靜かに湛へて
ここに生きて居るものの

刻々の新しいいのちをいつくしむ。
この愛と嚙呑とを兼ね行ふ『時』
時の頂點の白刃の光を
私は今まざまざと見る
恐れ賛嘆して感じる。

七月九日

私の前には現實が手を出して居る。

私の孤獨は明かにそれを食ふ。

私の身は伴を失つたが

私の肩は殺がれたが

私の足が立つて居る土はくづれない。

私は誰に向つて何を言はう
誰が私に答へ得る。

七月九日

さうだ、ここにこの足の下に
まだ血が乾かないで居る。
愛着の夢の荒敗を泣き
魂の寂寞にももの狂はしくなつて
すべてを疑つた御身の心から流れた血が

まだなまなましく足の下に乾かない。

私の心はその血を見て
凍るやうな悲しみを感じる。
御身はここに流れて居る血に依つて
その痛みを訴へ
静かに私の心に迫る。
私の心はその爲めに激せず
ただ残されて動かない事實を見る。
すべてこの事は
吾等の力の微弱な爲めに

人間の智慧の貧しく浅い爲めに
ここに流れて居る血が
みづから胸を破つて苦しんだ心が
その生涯の事實を主張して居ながらも
空しく土に吸ひつくされて行くのを恐れる。

私達の過去は

互に肉迫し、相搏つた。

私のからだに生えて居るさけが

御身の全身を刺した。

御身のたましいは裂けがたい膜に包まれて

私が底から火をつける事を拒むだ。

溶け、相燃えんことを祈りながら

溶け得ざる二つのたましいは

忍容と愛との

あらゆるものを抱きながら

凄惨な戦をした。

吾等を拒絶するただ一枚の膜は

あらゆる美しいものを種子のままに

殺しつくさうとした。

私はその前にいら立つて心が疲れ

御身は冷く失望した。

世の言ふ了解は

相生くる心に通ふ力ではない。

みづからを忘れた愛慾は

昏盲な本能にすぎない。

私と御身との争闘は

この遂に破り得なかつた

一枚の膜に向つて流した血であつた。

吾等の力の弱かつたことよ！

みづから抱き衛る愛を荒して

過去を愚なものに蔑視した。

今私はわれとその擾亂の中にまみれ叫んで

心をくらまして居たあらゆるものから逃れ

去り

ここにこの足の下に流れて居る

御身の血を見て深く思ひ沈む。

この血の中には

まだ生れず、滅びざる

多くの種子がある。

御身の中に生れ

生育し、繁茂すべき多くのものが

この血の中に光つて居る。

その種子の生育さきもに

青空の喜びさなるべきものが

寂しく私の肉の中に残つて居る。

私はこの我を慟哭する。

御身が今なほ靜かに主張する言葉をきき

みづからの薄弱に慄えて

心が痛烈な怒りに燃え

この身を土の上に擲たんことを願ふ。

七月十三日夜

けれども、何がすべての最後だ！

私の目から隠れて行つた

それが最後と言ふのか。

死は人の身に恐しい激動を起し

感情を轉倒させ
冷い、微かな、音樂の享樂に似た
情緒の波動を起して
生きた人を魔酔させる。
人は死こそ人に
その實在して居た生活を忘れ
消し去らうとする。
これが眞實か。

私はあからさまにその無智を冷笑する。
ああ、かくの如くして葬られ去つた無數の

魂よ。

彼等は何故に怒つて

この放漫な生きた人の遊戯を打たないんだ。

私は悔恨の惑亂から頭を上げる。

私は死の消滅を信じない。

吾等の流した血から

再び新たなる生命を生れしめよ。

吾等の間にあつた膜はまだ破りつくされな
い。

私の心は今感激し易く

危く、もろい。

しかし、私はかすかに黙啓を感じ
ひそかに未來をはかる。

その隠れ去つた人は

時ごとに再び私に歩み近づき

私の目に現前しようとする。

私達はふたたび相對するだらう。

その時に、吾等の生命は

かつて流した

この血の中に光る種子から

新しい芽をふかせる！
死を冷笑する力を生め。

七月十三日夜

私のこの肉体は貪婪な慾望の固りだ。

すべてのものに向つてはてしなき飽満に飢

ゑ

限りなき食物を見る。

それが私をそそりたてて誘惑し

激動させ

失望させる。

すべてのものに不満を感じ

所謂『平安』をかき濁す。

私はこの地の底から生へぬかんこころを願ひ

この手にすべてのものを握まうとした。

みづからの心の貧しさを憎み恐れて

貪食した。

それでも私には足りない。

この飢ゑたものの心は恐しい。

御身の全身が

私のすべての飢餓を充し得ないとしても

それは御身の貧しさではない。

ただ、その單純が私の飢餓を強くさせる。

私はその力で鞭うたれた。

これは耶蘇のにくんだ惡魔の心か！

私はさう思はない。

私はこの飢餓の不純を憎むけれども

自分の肉体がその中から

必ず豐麗なものを生むことを信じて居た。

その爲めに

私はみづから血を流すことを喜んだ。

この陰に御身は涙を流した。

それが私の悲しみである。

私は自分の一つの魂が

ほしいままに飢え求めた陰にないて居た戀

牲の爲めに

今、この貪婪な心が泣く。

御身がその處女の日の心に夢みた清純は
永遠に一つの旋律をなして光り

御身の愛の喜びの歌に
私をも連れ唱はせようとした。
それを私は冷笑した。
その毒が御身を凍らせた。

私は痛まじさに慄える。
残虐の跡は
寂しい敬虔の心となる。

七月十四日

今、ここに生きて居る男はからだ半分だ。
愛の半分なのだ。
対象を失つた一本足だ。
何と言つても半分だ。

この男はあはれむべき自然のかけらだ。

一度、抱合の圓い形をして居たから

この半分はあはれむ可きものだ。

それぢや

この不具者の半分はさうなるんだ

別のもを持つて來てくつつければいいの

か。

人工植肉法はこの魂を圓くすると言ふのか。

ぜうだん言つちや困る。

生きた魂だ。

便宜で魂は育たない。

見て居てごらんなさい

今に奇蹟が行はれる。

このなくなつた半分は自然に補填される。

それは外からぢやない。

切り口から芽がふくんだ。

それが自然の力なのだ。

そして一人で一つになる。

七月十四日

私はただもがく
私の手が攔まうさして居ながら
何にもない。
私の目は見て居ながら
形がない。

私の心にその人が親しく生きて
しみ透して来るのを感じながら
私の尖端は茫漠として居る。

この私の弱さは
愛の貧しい爲めなんだ。
私が最も親しく
最もよく知つて居た魂が
今この手に觸らないんだ。
このやうに求めて居ながら
幻影に似たものを見て居る。

だから私の中から
じりじり締め上げられる。

さうすればそれが掴めるんだ！

七月十四日夜

御身は今まことに
自由無礙なりや。

その身にまつはり

はいかりて心をくらし

濁かきし

もの狂ほしき惑亂を生みたりしものは
今すべて滅び去りしや。

御身はかの日の肉体の死ごもに
まことの孤獨なる心の目開き
みづからを知り
人を思ふや。
死は生きたる肉体の感じ得ざる
無礙の境をその心にあたへしか。

御身は嵐に誘はれたる波のごごとく

いのちご肉体ごの痛みに叫び
なほ生きんごして
生きたる吾等の境に向ひ
痛み叫びながら
みづからも思はざる
かの驚く可き一線を遂に越えたり。
この一轉は拒むべからざるものなれば
吾等のすべてはただうなだれ従ひたり。
しかして御身は疲勞せる微笑に返り
箴黙し
嚴肅なる孤獨の中に入れり。

われはその静かなる青き顔を見たり。
さきの時のごくもの言はんミする。
御身の唇に向ひて
われいまだ知らざりし深き愛にうたれ
たへがたき痛ましき
待ち望みたる到達の喜びミを感じたり。
わか心は踊らず
沈み入り
泌み渡り

御身が言はんミする言葉に耳をすます。
御身の箴黙は切々にわれに傳り來る。
言葉なく、形なく
されきもわが心は感じ響く。

よきものを抱け
善美の境に到れ
われ今御身が越えたるその境を
親しく心に觸れて知り
その一線を見つめ
御身の突差に歩みたる一步を見つつ

さらに新しくかく言ひつづくる言葉を感じず。

われ世を終るまで何を恃まんや。

この貧しき心に苦まずして

何を求めんぞする。

御身はまここに愛に光りて

さらに深き愛をわれに求め

微笑して目を放たず。

わが心みづから動きて答へんぞす。

さなり、御身がわれに見する微笑は

何處より來る。

無礙の境より涌き出するものなりや。

われ心に深く感じて御身に對す。

御身の爲めになけきをなし

御身を滅び去りたるものにして

世の幸の爲めに我をはかるものを憎む。

いかばかりなる人間の智を恃みて

吾等がすぎし道の上に刻みたる

事實

相感したる心こそ

葬り去らんぞするぞ。

御身はこれらの昏き心の爲めになやむな
れ。

人は目が見る能はざる境を

すべて闇と感じ

闇は冷かにして

愛を知らずとす。

されば死を恐れ

汚れたる尊きものとなすなり。

われは御身がなほわが前にあるを見る。

さればさきの日のごとく

御身の魂を思ひて

御身の豊かならんが爲めに祈る。

御身は今まごに

自由無礙なりや。

われを悲しみ嘆くものと思ふなが極。

かの極めて遠く

恐しく

感傷も、夢想の中でのみ見ゆる死を

かく近づきて見つつあれば

わが心はおのづから

その異りたる境に尖り集る。

われはそれを否まず

わが言葉をくり返す。

わが心は

この最も親しきものを奪はれたるに依りて

この一線を近づきて見

その人に向ひかくもの言ふが爲めに

この心親しく

明かにその境に觸れんさす。

死の境は暗からず。

われらが生くるごさく

かの境にある人人も生きてあり。

ひさたび、われらの前に

形をすてたれども

その人人は現世にありし日のすべてを持ち

て

その境に入れるなり。

さればわれくり返してまゝにもの言ふ。

かくもの言へば

わが心動き、涉り行き

御身が在りし日にこゝならす。

われを悲しみ嘆くものこ思ふなかれ。

七月十四日夜

私の背には

動かすべからざる過去がある。

私に『今日』が突然生れ出たのでもなく

私の前から隠れて行つた人に

すべての終局が来たのでもない。

俄かにすべてのものが

根底から覆り

過去の存在が無に歸し

私がたちわられた半分になり

前生涯が夢になつたこ

誰が言ひ得る。

私が背負つてる過去は

神の手でも消すことの出来ない

事實である。

その事實は

生の生育の道程であり
現在と未来との基礎である。
この道には
私があり
今死に隠れた人があり
父母があり
弟妹があり
友があり
かの人があり
多くの群集がある。
私においてすべての事實は

一つの肉体の中に集つて光る。
これが私を押しして
次の一步に入らしむる
生の抱含する一團である。
私はこの過去を背負つて居る
この過去の中に最も親しい一人が
私と相共に築いて来た道程は
私の存在と共に今もここにある。
私の中にこのすべてのものは生きて居る。
私が如何に變轉し

如何に新しいものを加へるにしても、
過去はその底の礎である。

この私の生の中に加はり
さらに道の未來に臨み交る
その人よ。

吾等が相生きた事實は

渾沌の中から覺めなかつた種子であつたこ
しても

深く信ぜよ。

かく御身と相進み來り

さらに進み行かんとする

この道を信ぜよ。

この心の前に多くの幻影と感傷とは消え去
り

『今日』が『昨日』の上に
つみ重なつて居るのを見よ。

七月十五日

無花果の果がうれ
 葡萄の房がふくれだし
 桃の果が水を含み
 蓮の根に澱粉の粒が累々として光り
 浸々夏が進み行く。

日光と水と
 進み行く時に促されて
 地上の樹は
 すべて生殖の結果の爲めに重くなれり。

身の中に慈愛を抱き
 地より盛り上りて
 あまねき日光の下に
 美しく輝く木々よ。
 沸騰せる情熱は充たされたり。
 紗を蒙り居たる夢は

明かに姿をあらはせり。

今わが頭の上に

身を並べてみられる果實を

つみ重なれる木の葉を**見れば**

地上は平かに**静か**にして

整然たる進展の歩足は止めがたし。

われ、黄に傾きつつある太陽を見

この『時』が移り行く力を感じず。

人間の死は

この果實の木より落つるに異らず。

ただ一つの波動起り

地上に漲り錯綜せる旋律に

新に一つのを加ふるのみ。

内は土に含むものの中に加はり

個性を失ひて

渾沌に返る。

土は奮激せず

静かにこれを呑み去る。

われこの拒む可からざる力を感じず。

しかもみづから生の止みがたき責に奮激す。

これらの渾沌に返るものこ

この生の永遠なる未来を進みゆくものこ
われ明かに二つを見ればなり。
われこの移りゆく「時」を見て
われより奪ひ去られたる人を思ひ
空しく填充するものなき寂しさこ
計りがたき因果さに驚く。
地中と他界と
二つに別れたる一つの肉体を感じれば
わが心に迫つて
われを奮ひたたしむるものあり。

白き日は烈々として地にふりそそぐ。
地上にはみのりたる果實は累々たり。
平かなり
静かなり
充ちたり。

新しく起る可き事實は
この人の死より
轉換の起調をなして
無限に開けてくる。
私が生きて居る限り

私のいのちが伸びるかぎり。

何にも永遠を計る事はない。
この現實に起るものに
ものものしい約束をするのは愚だ。
必然を知らぬ心を振りまはすな。
奇蹟に驚き慌てる心をおしつけるな。

七月十六日夜

お寺に行つても何にならう
焼いた骨に涙を流しても何にならう
私は泣きに行く快樂はほしくないんだ。
ぢつと見つめるものは他にある。
氣味の悪い尊いものにして

そつと身を引いて香をたく
そんな芝居はよしませう

芝居は坊主がすればいい。
坊主は商買だ。
坊主が据ゑて居る關所の中に
灰になつてるからだに
わざわざものを言ひに行く
それが私にはいやなんだ。

もつと身近かに居る人を

無理に遠い處においでして
お寺ののでんで野宿させる
それが私には本氣でない。

だから

お寺に行つても何にならう。

七月十七日

杏の實が赤くなる。

それを見入つて喜ぶ

黒い瞳の脛は開かない。

この事が私には

宇宙に響き渡る叫喚になつて
心をつき通す。

何故と言ふ言葉を出して・
何を振り返る余地もない。
ただ心をつき通す感動が起る。

玲瓏として

廣く漲つて居る宇宙に
鋭い赤光が一すじ貫いて居る。

この時私の心は
静かに沈み入り
切られたからだから流れる血を忘れて居る。

鋭く

悲しく

このからだも光る。

七月十七日

現實は騒然たり。
群り、涌き、叫び、笑ふ。
雑音のわめきは
一つの太き沸騰となり
一つのいのちは

大海に沈み入る石のごまく
音もなく葬られ
忘れ去らる。

かくのごまき寂しさに欺かれて
悲しむなかれ。
これらすべては眞の力にあらず。
これらの群集の雑踏は
何事をもなし能はじ。
これらの沸騰に定相なく
今日より明日に移りゆく

それを追ひて走るなかれ。
この沸騰の中に狂ひ交りて
死の價値をはかるなかれ。

まことの力は在りしものの中に含まる。
みづからを信ぜよ。

水に溺るるごこく

この雑音に紛れ入るなかれ。

亡せ行きたる人よ。

御身が抱き持ちたるものが

深く實在の中に刻み入り。

根をはりて茂らんこゝを祈れ。

すべての聲は消え去り

形は失はる。

これを恐るるなかれ。

在りしものをなほ明かに在らしめよ。

われ今深くこの雑音を蔑視し

ただひたすらに

一つのものゝ生育を祈る。

ほかに言葉なし。

わがすべての愛を

この中に集む。
われを光さならしめよ。
御身もみづから光さなれ。

七月十八日午

その生きて居た日には
からだ全体が人を愛し
静かで、黙つて見衛つて居た。
今

この人の一生は口をつぐんだ。

起句索引

序

われ今、御身にも言はん。(二)

御身の痛みは遂に終つた。(四)

病院の應接室の椅子は倦怠した白い色をして居る
目を覺ませ。(一六)

痛みは終れり。(三)

わが心に御身は光る。(三五)

私の家の一室に置かれてあつた御身の亡骸は
祈る言葉を知らざれば。(三四)

静かな黎明が来た。(三七)

闇は静かに重くなりたり。(四五)

静かなる黄昏は来りぬ。(五三)

わが瞼の重さよ。(五七)

私の身の周囲は広い海となり(六三)

花が咲いた。(六八)

私の前には現実が手を出して居る。(七三)

さうだここにこの足の下に(七四)

けれども何がすべての最後だ！。(八二)

私のこのからだは貪婪な慾望の固りだ。(八六)

今、ここに生きて居る男はからだ半分だ。(九二)

吾はただもがく(九四)

御身は今まここに(九七)

われを悲しみ嘆くものと思ふなかれ。(一〇六)

私の背には(一一〇)

無花果の果がうれ(一二六)

新しく起るべき事實は(一二三)

お寺に行つても何にならう。(一二四)

杏の實が赤くなる。(一二七)

現實は騒然たり。(一三〇)

碎銘(一三五)

大正四年七月廿五日印刷
大正四年七月廿八日發行

不許複製

發行所

東京丸の内

電話本局五二五六
振替東京三〇〇九五

著者 發行所
印人 印刷所

定價 金六拾五錢

東京市芝區三田綱町一番地
東京市水戸區三崎町三丁目一番地
東京市神田區三崎町三丁目一番地
東京市寺田區山下町二番地
東京市宮崎區山下町三番地
東京市京橋區山下町二番地
東京市喜多區山下町二番地
電話新橋三二八番

婦人文藝社

本誌は唯一の投書雑誌
婦人文學の好伴侶

女子文壇

注意必讀

- 一冊 十五錢 郵一錢五厘 計十六錢五厘
- 十二冊前金 同十八錢 計金 一圓七十四錢
- 一圓五十六錢
- ▲御注文はすべて前金のこと
- ▲郵券代用は一割増のこと

投書欄懸賞募集規定

甲種	乙種	丙種	其他
小説 百廿三行以內	散文 八十三行以內	詩 三十五行以內	其他、誌友クラブ(實際欄、地方文壇)等を大いに募集す
手紙 五十三行以內	短文 廿三行以內	短歌 一人十首以內	縮切毎月七日(毎月號に發表す)
俳句 一人十首以內	題畫 五紙體裁以內	其他、誌友クラブ(實際欄、地方文壇)等を大いに募集す	賞品目録
水野葉舟選	谷江風選	溝口白羊選	河井醉茗選
中村枯林選	若山牧水選	黒田忠次郎選	杉浦非水選

此暑さを如何にお過して御座いますか、私共が先頃からの苦心と努力との結果は漸く今日に至つて

大正才媛文集

定價 卅八錢
送料 四錢

の發刊に相成りました、私共は此の『赤い表紙の可愛い本』を是非々々皆様の消夏のお伽に差出したいと存じます、内容は論文、散文、書簡文、日記文の四項に分つて、日本全國に亘る現代の若き婦人百數十氏の作品を集めて居ります。

水野葉舟さんは『これを書いた人達に一生懸命な處があり』と仰り、河井碎茗さんは『今現に若き人たちは、何んな眼を以て、そこに自分と共通な姿を見ますでせう』と仰つて下さいました、何卒御一讀の上、御批評を賜はりたく、特に御案内申上げます。

發行所 東京丸の内市 婦人文藝社 電話 本局五二五六 振替 三五〇〇九五

執筆者芳名

▲瀧口直亮夫人須美子 ▲大倉喜七郎夫人久美子 ▲岩崎重次郎夫人延枝子 ▲黒須龍太郎夫人恒方夫人安子 ▲高橋養助夫人朝吹常吉夫人磯子 ▲小川一雄夫人豊子 ▲三恒夫人伯令嬢 ▲福田和五郎令嬢 ▲梅子 ▲中山夫人愛子 ▲川崎夫人 ▲清子 ▲遠山英一令嬢 ▲福田和五郎令嬢 ▲梅子 ▲中山夫人愛子 ▲川崎夫人 ▲春子 ▲江木波子 ▲宮本央令嬢 ▲福田和五郎令嬢 ▲梅子 ▲中山夫人愛子 ▲川崎夫人 ▲子 ▲木定男夫人ませ子 ▲淺田孝夫人系子 ▲比志島輝夫人雪子 ▲高橋研三夫人旭子 ▲大石豊太夫人夏子 ▲高橋是清夫人愛子 ▲秋海棠 ▲日向輝武夫人三郎夫人みり子 ▲宮田脩夫人多賀子 ▲三岡捨治夫人鶴子 ▲日向輝武夫人

名流婦人日記

定價 金一圓
郵税 八錢

三百六十五日間 上中流婦人の聯珠の如き日記集其大膽新奇有文學
に於ける現今 的心的教育的社會學的貢獻に於て又其の文學
界破天荒の試みである大正新時代の社 内面描寫裏面暴
露を見ざる者は 同性の胸裡を知らず 異性の生活に
婦人として は 同性の胸裡を知らず 異性の生活に
最新 人性の世界に觸れざる者さす誰か猶此書

發行所 東京丸の内市 婦人藝文社
電話 本局五二五六
三東春振 五九〇〇

